

真宗僧伽の原点

— 因位の魂 —

大城 邦 義

仏教は「仏道」があることにおいてはじめて人間にとっての「仏の教え」たりうることは明らかである。仏道なき仏教は、肉体（身体）なき人間存在と同じく、幽霊のようなものである。

曇鸞は、「経とは常なり」（『往生論註』真宗聖教全書①二八〇頁）と押えているが、「経」が「教」として「常住不変」に「能く衆生のために大饒益を作す」（同右）こと、すなわち「常に世に行ず」（同右）るものなることを「経」の生命として顔っているのである。

そこから「仏道」に立っての教相判釈が生れてくるわけであるが、そこに浄土教の面目があるといえる。

仏教が仏道である、すなわち仏道としてのみ証しされうるものであるということは、仏教が、事実として「因道」を明らかにしているものであることを知らされる。仏教はわれわれに何を教えているか。即ち、われわれの成仏の因道を教えているということである。

これから私は、因位仏道の精神というものを少し考えてみたい。そして、そこからおのずから、仏道である真宗の僧伽の原点が明らかになってくるのではないかと思うのである。

一 帰依三宝

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそれほどの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなざよ」（『歎異抄』聖至②七九二頁）

この親鸞の「つねのおほせ」の中に、真宗僧伽の成立原点、出発点を見ることが出来る。それは、「親鸞一人」が仏法大海中に召されていく、本願一乗海中に撰取されていきつつあるという現在性、と同時にそこにおのずから開発されている懺悔と謝念。そこに私は「親鸞一人」において確認・確立せられている「僧伽」を拜するのである。それは公けなる「親鸞一人」のすがたであるといえよう。それは全く「親鸞一人」の至純なる「帰依三宝」の姿勢から来ている。

思うに、「帰依三宝」というも、畢竟「帰依僧」に帰する。

何故なら、本来仏教は人間にとっての真の宗なる教えとして作用する「仏道」であるとき、はじめてその全き存在意義は成就するのであり、そこにおいてその仏道を歩んでいる仏弟子（僧）こそが「仏・法」の証現者だからである。すなわち、「仏・法」の具体化現実化したものが「仏弟子」の存在であり、又同時に「帰依」ということが観念的な事柄でなく、「仏法」を生きる

者の全存在的、現実的、具体的、生活的、事である以上、「僧に帰すること、すなわち、まず自らが仏弟子として位置づけられること以外に、「帰依仏」も「帰依法」もないということである。故に「帰依仏・帰依法」は端的に「帰依僧」に収まるというべきである。

自らが仏弟子として位置づけられるということは、「既有此道」なる「仏の法」を生きている仏弟子との出遇い、すなわち、先師・先輩なる「よきひと」との出遇い、そしてそれへの帰敬が、その端的な一点となる。

さきの親鸞の表白は、親鸞が自らの「一人」のうえに「弥陀の五劫思惟の願」として具体化し現に作用している「仏法」を「ひとへに親鸞一人がため」と拝しているのであるが、その「一人」なる「人」の上に「僧伽」は成就しているのである。何故なら、その「一」は弥陀の「本願」によって「汝」とされた「絶対一」であり、その「一」の中に又、弥陀の本願によって「行者」とされている「人」が成就しているからである。故に、その「一人」の中では、「親鸞一人」と、無数の「本願の行者」とが相即相入しているということである。「ひとへに親鸞一人がため」と「本願」に帰依している「親鸞」と、その「帰依」の現在性故に、そこに成就している「弥陀の本願」の具現者なる諸仏善知識とは「一如」の出遇いを成就しているのである。親鸞にとって、その諸仏善知識の最先端に居るのが「法然」なのである。

「親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに、別

の子細なきなり」(『歎異抄』聖全②七七四頁)

本願念仏への帰依帰命の只中に「法然」を端緒とする諸仏善知識を拝している「親鸞一人」のすがたがうかがえる。そこに「僧伽」の世界の原点が見据えられている。

故に「僧伽」とは、自身一人を「仏弟子」として見出しめられることにおいて、限りなく、この私を仏弟子たらしめている「諸仏善知識」への謝念・帰敬のところに成就しているものと言えよう。端的に言えば、「去・来・現」を貫いてある諸仏善知識の歴史を、仏弟子たらしめられているこの私「一人」のうえに拝する、ということである。本願の歴史を拝するところしかし「僧伽」はない。それは単に過去と現在という実体化した歴史を見知するのではなく、はるか未来をも先験している去・来・現の本願の仏事なる歴史を拝見するのである。

そのように本願の歴史に領いているが故に、親鸞は、

「このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなり」(『歎異抄聖』全②七七

五頁)

と、「つくべき縁」も「はなるべき縁」も共に包み取って、「親鸞は弟子一人ももたずさふらふ」と静かに仏道を歩んでいるのである。そこに、本願への絶対的信頼から生れているひろびろとした精神世界がある。それは、限りなく、自ら弟子の道に立たしめられていく中で実感されてくるものであろう。

そこにあるものは、限りなく「よきひとのおほせをかむりて信ずる」聞無窮の一道である。そこに、私は「ただひとたびの

廻心」の生み出す、限りなく新しい領きが生涯を尽くす歩みとなることを思う。故に、先の「聖人のつねのおほせ」と、親鸞の廻心の表白である第二章の「たゞ念仏して……」の言葉とは完全に重なっていることとして頷くことができるのである。言いかえれば、この第二章の表白の限りなき領きが、さきの「聖人のつねのおほせ」なのである。それは初一念への限りなき還帰と言えよう。すなわち、それは限りなく因位に立ちつづけていくすがた、限りなく出発点へ帰り、初一念を掘り下げていく因位の姿勢である。因位を尽くす、その「つね」なる姿勢とは、「恒願」なる様、すなわち、

「恒はつねにといふ。願はねがふといふなり。いまつねにといふは、たえぬころなり。おりにしたがふて、ときどきもねがへといふなり。」(『念多念文意』聖全⑥六〇四頁)

といわれるようなのちの姿勢であろう。「さるべき業縁」の中で、「おりにしたがふて」、「さるべき業縁」を文字通り「機縁」として、限りなく法蔵の願心へと掘り下げていく。限りなく、自閉的自己満足の「信」の底が、「さるべき業縁」を機縁として打ち破られていく中で、法蔵の「願心」に呼応し、還帰していくのである。それが因位を尽くす人生態度というものであろう。

二 『教行信証』『教巻』の位置と意義

以上の如きことを考えていると、『顕浄土真実教行証文類』の位置・性格も、私には同じく、限りなく浄土を因位として、

因位において明らかにせんとしているものであると頷ける。

親鸞は「顕浄土真実」の歩みを、一貫して「竊に以みる」「謹んで按ずる」「夫れ以みる」「謹んで顕わす」「竊に推する」という退一步の姿勢で取り組んでいるが、その「願」と「竊以」「謹按」等は、明らかに対応・呼応していることが頷けよう。すなわち、親鸞は「竊以」・「謹按」において、「顕浄土」を實現しているのである。

「願」とは「光也、見也、明也、覲也、著也。キツト明にマガヒなく照り耀く程にあらはるること」(大字典一四八五頁a)という義であるのに対し、「竊」とは「私也」との義であるといわれるように、「願」という公けの世界は「竊」という極めて個人的な場を踏まえた姿勢によって、私一人という限定された場で明らかにされるということである。すなわち「浄土を開願する機縁」は、正しく具体的に親鸞「一人」が生きている現実の只中であるということである。

その時、「顕浄土」する者は、限りなく「愚禿」として照出され、深信せしめられ、その「愚禿」はどこまでも衆生の現実という大地を見つめつづけずにはおれないという、「われとわれら」の現実を課題として荷なわされる。それがひとたび「廻向」の事実にくれた者の尽くさねばならぬ道である。

廻向の事実にくれて、仏弟子として仏道に立たしめられたところから、因位仏道の歩みは始まる。その展開の具体的事実が『顕浄土真実教行証文類』六巻であるが、その六巻中、「教巻」

こそ他力本願念仏の仏道の因位成就の要を明らかにしているものであろう。「教巻」はその劈頭に、

「謹んで浄土真宗を按ずるに二種の廻向有り。一には往相、二には還相なり。往相の廻向に就て真実の教行信証有り。」

(原漢文、『教行信証』「教巻」聖全②二頁)

とうたい、「浄土真宗」とは「往相・還相廻向」を柱とする宗教であり、廻向から始まり廻向に尽きることを宣言している。そして「弥陀・釈迦・阿難」の呼応関係において「廻向」の意義を「出遇い」という一事に見定め、「弥陀・釈迦・阿難」の位置づけの中から「顕真実教」を「大無量寿経」と決定している。そしてその経の要は「本願為宗・名号為体」であると押えているのである。そして

「何を以てか出世の大事なりと知ることを得るとならば」

(原漢文、『教行信証』「教巻」・聖全②三頁)

と問いを発し、その答え(証し)として、

(一) 阿難が釈尊の上に五徳の瑞相を拝見しその意義を問うたということ

(二) そのことを問うた阿難への釈尊からの問い返しと阿難の応答―阿難の所問の吟味、

(三) 釈尊自ら阿難の所問の重大なることを讃嘆し、出世本懐の意義を自己表白していること、

以上の三つの内容を押えて、『大経』の発起序から引用説示しているのである。そして以上の『大経』の説示している意義を再確認するようにして、異訳の『如来会』からは右の(二)と(三)に相

当する部分を最も簡潔に引用し、同じく『平等覚経』からは(三)に相当する部分を端的に押えて引用し、そして最後に『述文贊』によって釈尊の五徳現瑞の意義を明らかにすることをもち、

「顕真実教の明証」としているのである。以上の、ただこれだけのことをもって、親鸞は何を言わんとしているのであろうか。他なし。「教」の内実とは正しく「出遇い」に尽きるということである。釈尊と阿難の「出遇い」において象徴される「仏相念」の事実、「出遇い」において、「教」というものは、たまたまものであるということである。正しく「出遇い」において

「教え」につつまれる、仏弟子になるわけである。阿難は釈尊の上に五徳の瑞相を拝することにおいて初めて、出遇ったのであり、そこにおいてはじめて現成せる法(dharma)の中に摂取されたのである。『述文贊』に託して明らかにされていることも、素直に受けとめれば、「出遇い」においてふれることができた「如来の徳」(如来の用き)に他ならない。五徳現瑞せる如来の用きにふれることにおいて、自らも又その如来の力用の中を生きる仏弟子とならしめられるのである。そのことを更に言えば、「奇特の法に住し」「仏の所住に住し」「道師の行に住し」「最勝の道に住し」「如来の徳を行じ」たもう釈尊の面目に実存的に生命の至奥において出遇えば、おのずからそれらの徳に照らし出されてくるということである。

そのことは、この「教巻」の『述文贊』の文に照応するようにして、「信巻」において、「獲信の利益」として「現生十益」が語り明かされていることから、明瞭に領かしめられる。そ

して、その「現生十益」も「聞と言ふは……」という表白の中
から展開していることを憶うと、更にはっきりとしてくる。す
なわち「聞」において実存的「出遇い」は成り立ち、その呼応
において自らも「仏弟子」なる「信心の行人」たらしめられる
ということである。

親鸞が、自らの生命の至奥における法然との出遇いの体験体
解を、そっくりそのまま「教巻」の所述に託して語らしめてい
ることは明らかであろう。釈尊と阿難との出遇いという一点に
立って、「弥陀・釈迦・阿難」の位置を決定し、『大経』を真実
教と決定しえたのは、正しく自らの上に成就している、法然と
の出遇いから明らかになった仏道史観に立って「一代仏教」を
見すかしたからなのである。教相判釈といっても他ではない。

この「教巻」に託して語られている「仏仏相念」という出遇い
の一点をどう頷くことができるかにかかっているというよう。親
鸞の仏教史観が、『大無量寿経』の流伝史であるといふことも、
「教巻」を見れば、それが大乘仏教の論理の中から生れてきた
ものではなく、「仏々相念」の仏道史観において見定められた
ものであることは明瞭である。

そして、法然という「よきひと」にまで具体化した本願に頷
き、帰することによって、親鸞は自らが受領せしめられた、そ
の「本願」の「行証」という課題を、生涯のものとして与えら
れたのである。それ故に『顕浄土真実教行証文類』は生れ、特
に「行」「信」「証（真仏土・化身土を含む）」の開頭を必須せしめ
られたのである。その地盤は、ただ「教え」に出遇った、仏道

に出遇ったという一事実にある。

三 廻向——「共」の成就

「本願」の具現者である「法然」に実存的に生命の至奥で出
遇い、「帰本願」した親鸞のことを思う時、私は、そのように
親鸞を転換せしめた如来の大悲心を憶わずにはおれない。親鸞
自身も自らの己証を課題として、「信巻」に「仏意惻り難し、
然りと雖も竊かに斯の心を推するに」と自問し、聞思してい
るが、今、私は、親鸞を廻心せしめた如来の廻向表現の苦闘を憶
うのである。「廻向為首得成就大悲心」ということの内面をひ
そかに憶うのである。『論註』の言葉をもって親鸞は、その内
面をかく語り明かしている。

「云何が廻向したまへる、一切苦悩の衆生を捨てずして心
に常に作願すらく、廻向を首と為して大悲心を成就するこ
とを得たまへるが故にとのたまへり。」

廻向に二種の相有り、一には往相、二には還相なり。往相
は己れが功德を以て一切衆生に廻施したまひて、作願して
共に、彼の阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしめたまふなり。

還相は彼の土に生じ己りて、奢摩他毗婆舍那方便力成就す
ることを得て、生死の稠林に廻入して一切衆生を教化して
共に、仏道に向かへらしめたまふなり。若は往若は還、皆衆
生を抜いて生死海を渡せんが為めにとのたまへり。是の故
に廻向為首得成就大悲心故と言へり。〔原漢文・聖全⑥六六
頁〕

「大悲心を成就する」、そのために如来は「廻向」を「首」として、「廻向」に全存在・全生命をかけて立ちあがられたのである。すなわち「皆衆生を抜いて生死海を渡せんが為めに」は、「廻向」という手立てしか他にないのである。すなわち、「廻向」とは、衆生と運命を「共に」することである。「廻向」を「表現」と頷かれた先輩の正確さを憶う。「表現」とならなければ、畢竟衆生の道とはならないからである。「共に」

「安樂浄土に往生せしめ」んため、「共に仏道に向かへらしめ」んためには、廻向表現して衆生と同じ次元に立ち、歩みを共同する以外ない。でなければ、如来というも畢竟他者であり、衆生にとって外なるものではない。外なるものは、いかなるものといえども相対有限性をまぬがれない。そうであるかぎり、衆生にとっての救いの道とは絶対になりえないのである。

何故なら、衆生というものは、どこまでも相対有限なる故に、その相対有限性にどこまでも執着し、相対差別の迷界に沈み込み、そこから脱出するすべを衆生自身の内にはもたないからである。それが相対有限界、即ち娑婆の定めなのである。

「一切群生海、無始より如来、乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清浄の心なし、虚仮諂偽にして真実の心なし。」(原漢文、『教行信証』「信卷」聖全②五九頁)

と言ひ、又、

「無始より如来、一切群生海、無明海に流転し諸有輪に沈迷して衆苦輪に繫縛せられて清浄の信樂なし、法爾として真実の信樂なし。是を以て無上功德、値遇しがたく、最勝

の淨信、獲得しがたし。一切凡小一切時の中に、貪愛之心常に能く善心を汚し、瞋憎の心常に能く法財を焼く。急作急修して頭燃を炙ふが如くすれども衆て雜毒雜修の善と名く、亦虚仮諂偽の行と名く、真実の業と名けざる也。此の虚仮雜毒の善を以て無量光明土に生んと欲する、此必不可也。」(原漢文、『教行信証』「信卷」聖全②六二頁)

と言ひ、又、

「微塵界の有情、煩惱海に流転し、生死海に溺没して、真実の回向心なし、清浄の回向心なし。」(原漢文、『教行信証』「信卷」聖全②六五頁)

等と言ひ、正しく、その衆生の衆生性故に、それ自身の中には相対有限界を脱出するすべを必然的にもたぬことを指摘しているのである。故にこそ、

「是を以て、如来一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て菩薩の行を行じたまふし時、三業の所修一念一刹那も清浄ならざることなし、真心ならざることなし。

如来、清浄の真心を以て円融無碍不可思議不可称不可説の至徳を成就したまへり。如来の至心を以て諸有の一切煩惱惡業邪智の群生海に回施したまへり。」(原漢文、『教行信証』「信卷」聖全②六〇頁)

と言ひ、又、

「如来、苦惱の群生海を悲憫して無碍廣大の淨信を以て諸有海に回施したまへり。」(原漢文、『教行信証』「信卷」聖全②六二頁)

と言ひ、又、

「如来、一切苦惱の群生海を矜哀して菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修乃至一念一刹那も回向の心を首と爲して大悲心を成就することを得たまへるが故に。利他真実の欲生心を以て諸有海に廻施したまへり。」（原漢文、『教行信証』「信卷」聖金◎六六頁）

等と言われることの重点感があるのである。

しかし、ではその「廻施」と言われ、「廻向」と言われることを、いかにして衆生のうえに実現しようというのであろうか。その時、私は、如来廻向表現の内面に力働している菩薩自身の誓いの中に、「唯除……」とあることに注意せしめられるのである。すなわち、「唯除」という誓白のところにこそ、「共に」という「廻向」の精神が成就する鍵があるにちがいないと憶うのである。

それはいかなることかと言うと、一端、「設我得仏、十方衆生、至心信樂欲生我國乃至十念、若不生者、不取正覺」と誓ったところから、更にあたかも自らの誓願そのものを撤回するかの如く「若不生者、不取正覺、唯除五逆、誹謗正法」と自らの精神に背反する如き逆流的表白をなしているのであるが、先ず端的に、そこに、私は、正しく如来の死を見るのである。すなわち、如来は衆生という大地に向って「唯除五逆、誹謗正法」と切り捨てる宣言をしたのである。故に如来は如来、自らの生命を放棄したこととなる。すなわち、如来は「唯除……」と表白したことによって、如来の如来、性を失ったのである。それは、誓願の一

切が崩壊していくことを意味している。願の故にこそ、如来は如来たりえていたのだが、その願が崩壊してしまった以上、無に帰してしまったということである。

しかし、それは一体どういうことであろうか。果たしてそうなのであろうか。

一面から言えば、それは他ならぬ、衆生の衆生性、性の救われ難さを反映していると言えよう。すなわち、如来は衆生をストリートに手をさしのべるように救うことはできないのである。逆から言えば、そのように如来を死に至らしめているのは他ならぬ衆生自身だということである。

しかし、ここで私は、更に本願成就文の中にも「唯除……」の言があることに注意したい。本願成就とは、本願が衆生の上に成就したということである。その成就したということの中にまで「唯除……」の言があるのである。これは一体何を意味しているのだろうか。

それは、正しく、本願が衆生の上に成就するには、「唯除……」の門を通らねばならないということなのである。この「唯除……」の門をくぐらずしては、衆生の救いが成就したとは言えないということである。

すなわち、言いかえると、如来は「唯除……」という姿勢で衆生にかかわっているのである。本願成就ということの中にまで「唯除……」の言があることによって、そのように如来は究極的にどこまでも衆生にかかわるものだということである。

故に、如来は如来、性を失ったのではなく、あえて言えば、

如来は「来」にその全生命を繋げるが故に、すなわち、「如」に帰ることを放棄しているのだと言えよう。すなわち、「如」に帰ることを止め、「来」に成り切っているのである。すなわち、如来は、絶対に衆生と「共」でなければ、「如」に帰らぬというのである。それが、如一來の「来」の真实性である。「如来の至心」を以て回施したまへり」と言い又、「利他の真心」と言われる所以を憶う。

如来の「来」の真实性、それは限りなく自らを因位に置かんという、「上求菩提下化衆生」の誓いである。故に、如来は如来↓来故に永遠に菩薩として衆生自身に成って、兆載永劫の修行に身心を据えておられるのである。

そのことは、われわれにそくして言えば、「諸有衆生」が「聞其名号」して「信心歡喜せむこと乃至一念」(原漢文、「信卷」聖全⑥六二頁)しても、「至心廻向したまへり」(原漢文、「信卷」聖全⑥六六頁)という事実には気がなければ、「衆生、仏願の生起本末を聞」いたことにはならないというわけである。すなわち、「聞其名号信心歡喜乃至一念」だけでは不十分、聞不具足だということである。真の、「仏願の生起本末」に徹した「聞」とは、「至心廻向、願生彼國即得往生住不退転唯除五逆誹謗正法」まで聞き取ることだというわけである。親鸞が、さきの前半を「本願信心の願成就文」と呼び、この後半を「本願の欲生心成就の文」と呼び分けたことの鋭さを憶う。「本願欲生心」への領き、そこに「至心廻向」の成就がある。如来は、衆生に「廻向」の事実には頷かしめ、「願生彼國」者たらしめんとして、「至

心」して「唯除……」の表白をなした。そこにおいて、「聞其名号」している「衆生」自身が、「真心徹到」して自らの内で「唯除」の機なることに頷くことによって、本願欲生心は成就満足する。そのとき、その衆生の内なる自覚は、「廻心懺悔」を内容としているわけである。

その「廻心懺悔」は、すなわち、菩薩の心である。如来の「至心廻向」において、衆生は「廻心懺悔」せしめられる。それは、ただに如来自身のひたすらなる「従果向因」の自己運動、捨身の行を内実としている。すなわち、如来は、「唯除……」と表白しつつ、救えぬ衆生の性を自己一身の責任として、如来は衆生という大地に沈潜し、因位修行の出発点に無限に立ち帰り、「欲生我國」と呼びつつ、衆生自身に「唯除……」の目覚めが発起するまで、因位で修行して待っているのである。

「唯除といふはただのぞくということばなり。五逆のつみびとをきらい、誹謗のおもぎとがをしらせむとなり。このふたつのつみのおもぎことをしめして、十方一切衆生みなもれず往生すべしとしらせむとなり。」(『尊号真像銘文』聖全⑥五六〇頁)

「総迎來といふは、総はふさねていふ、すべてみなといふこゝろなり。迎はむかうるといふ、まづといふ、他力をあらはすこゝろなり。」(『唯信鈔文意』聖全⑥六二六頁)

衆生自身が、「五逆のつみ」「誹謗のおもぎとが」を自覚自知し、「十方一切の衆生みなもれず往生」するまで「まづ」ているのである。それは「一衆生」における自覚の成就ごとに、「共

に「法性のみやこへむかへてかへ」るのではなく、「つみ」「とが」を自覚した衆生と「共に」「一生補処」に住し、無限に「いちの衆生にかかりはてていくのである。

無得光仏のひかりには

無数の阿弥陀ましまして

化仏のおの無数の

光明無量無辺なり（『浄土和讃』親全⑤六五頁）

ここに、思い合わされてくるのが、次の願言である。

「設ひ我仏を得らんに、他方仏土の諸の菩薩衆、我が国に來生せば究竟して、必ず、一生補処に至らん。其の本願自在にして、化する所の衆生のための故に、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱して、諸仏の国に遊び、菩薩の行を修し、十方諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化し、

無上正眞の道に立せしめんをば除く。常倫に超出し諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。若ししからずんば正覚を取らじ」『往生論註』聖全①三三三頁

「無数の阿弥陀」は、すべての衆生を「菩薩衆」と見、それらを必ず「一生補処」の菩薩たらしめんとするのである。「無数の阿弥陀」はすべての衆生に、眞実の「因位」（一生補処）を教えることによつて仏道を成就せしめようとしておられるのである。そのために、如来は如↓來して衆生の足下に来ているのである。否、衆生の身体にまで成つて来ているのであるが、衆生自身の上にさきの廻心懺悔が發起せざる間は、如来は成仏できなない。そこに如来と衆生の關いがあり、如来の限りなき捨身

の行がある。親鸞は言う。

「良とに以て、因より願を建つ。志を乗り行を躬め、塵点劫を歴て済衆の仁を懷けり。芥子の地も捨身の処に非ざる、こと無し。悲智六度撰化して以て遺すこと無し。」（原漢文『行巻』聖全②二九頁）

又言う。

「深く大悲を行ずるは、衆生を愍念すること骨體に徹入するが故に、名けて深と為す。一切衆生の為に仏道を求むるが故に名けて大と為す。」（原漢文、『行巻』聖全②一頁）
これらの言の言わんとするところは、正しく如来が衆生自身と成つて、同体している様を表わしているのであろう。それは、「信巻」における次の表白に至つて、より具体的に力強く語られていることを知ることができる。

「大慈大悲は名けて仏性と為す。仏性は名けて如来と為す。大喜大捨を名けて仏性と為す。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は若し、二十五有に能はず、則阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず、諸の衆生畢に當に得べきを以ての故なり。是の故に説きて一切衆生悉有仏性と言へるなり。大喜大捨は即是仏性なり。仏性は即是如来なり。」（原漢文聖全②六二頁）
「大」という言葉の表わしている、その「無上」性、無限定性、無条件性を憶う。「大慈大悲」「大喜大捨」とは衆生にどこまでも随順し、どのような情況にも随縁し、衆生と歩みを共にすることであらう。すなわち衆生自身に成ることであらう。ここでは、「菩薩摩訶薩」が「二十五有」に隨順し、「二十五有」

に身を置けないようなら、「菩薩摩訶薩」は「阿耨多羅三藐三菩提」を得ることができないというのである。何故なら、「諸の衆生」であることにおいて「畢に當に」「阿耨菩提」を得るからである。正しく「常没の凡愚、流転の群生、無上妙果の成じ難きにあらず」(信卷・聖全④四八頁)なのである。そして、ここにこそ、「一切衆生悉有仏性」ということの意義はあるというのである。「諸の衆生」に成る。ここに、限りなく「因位」に自らを据えていく菩薩の精神を拝することができる。その菩薩の精神は、「証卷」に至って、畢に、「信心」の内景としての「難思議往生」の無限の展開として、語り明かされてくる。今は、そこまで論及できない故に、又、別の機会に、「行」「信」「証」の展開をふまえて、考えてみたい。

思うに、上來述べた「帰依僧」の精神も、畢にはここまで展開領受されねば、真に自己自身のうえに「仏道」というものが具体化しているとは言い切れないことを教えられる。「帰依三宝」就中「帰依僧」の精神は、畢竟「帰依一切衆生」にまで展開して、はじめて具体化し、成就していると言えるのである。故に、ここにこそ、真の、如来への絶対信順があるということである。親鸞の表白が思い出されてくる。

「涅槃」とまふすに、その名無量なり。くはしくまふすにあははず。おろおろその名をあらはずべし。涅槃をば滅度といふ、無為といふ、安楽といふ、常楽といふ、実相といふ、法身といふ、法性といふ、真如といふ、一如といふ、仏性といふ、仏性すなわち如来なり。この如来微塵世界にみちみちたまへり、すなわち一切群生海の心なり。草木国土こゝろく成仏すとけり。」(唯信鈔文意) 聖全④六三〇頁

真に、「(大)涅槃」の何たるかを信知しているが故に、このような領ぎにまで展開しているのである。//本願の仏道//への領ぎの具体性をまざまざと見る思いがする。親鸞は更に言う。

「この一切有情の心に方便法身の誓願を信樂するが故に、この信心すなはち仏性なり、この仏性すなはち法性なり、

法性すなはち法身なり」(同右)

親鸞は、以上述べた領ぎをすべて「信心」の内実として領ぎ、「信心」の世界のこととして押えているのであるが、そこに親鸞の「信心」の世界の具体性とともにも強靱さを教えられる。そして、親鸞はこの「信心―仏性―法性―法身」という領ぎの中から、「法蔵比丘」を領ぎ出し、更に「尽十方無碍光如来」へと領いていくのである。そこに正に親鸞の信の世界観がある。